

## 無教会 ― 私の場合

一九九六年一月、東京で開催された「無教会キリスト教全国集会」のシンポジウム「全国集会について」で、私は発題のまえおきとして次のように述べた。「自己紹介がてら申しあげますが、私は未熟な人間で他人と一緒に物事をするのが不得手です。短くはありましたが、戦争中の軍隊体験で<sup>1</sup>集団の恐ろしさを知りました。また戦後初めて出会ったキリスト教では、「教会」の仲良し主義に些か辟易しました。それで内村鑑三を知ってからは、彼の「神の前に独り立ったる裸体のわれ<sup>2</sup>」という言葉や、「単独の勢力<sup>3</sup>」という文章に感激して、この四〇年間「独り、独り」と思って生きてきました。ですから、このようなシンポジウムの発題者としては甚だ不向きだと考えざるを得ません。」

これは全く私の本心で、私は（他人は知らず）無教会主義とは何より「独り主義」のことで、内村が私に教えてくれた第一の最も大切なことはこの一事に尽きると考えている。そして私のような意志薄弱な人間が、この集団主義の日本の社会で辛うじて信仰を保って生きてくるのができたのは、一と重にこの「独り主義」のおかげだと感謝している。

われは独りである。われの行くべき教会はない。われを教え導くべき教師も牧師もない。われと哀樂を共にするの会友もない。われはいったってさびしき者である。

しかしわれは独りではない。神はわれと共にある（ヨハネ伝八・二九）。彼は時々彼の聖霊をもつてわれを見舞い、彼の偉大なる奥義をわれに示し、われ独りあるも万有をしてわれの侶<sup>4</sup>伴<sup>も</sup>たらしむ。

そういうわけで、四〇年前「教会」を出た時、私は「教会を出て、無教会に入る」などは考えたこともなかった。私の恩師山本泰次郎<sup>5</sup>は「無教会」に対して極めて批判的であったし、そもそも私は先生の集會に出席したことは一度もなかった。公開の集まりは別として、無教会の集會というものも殆ど知らなかった。とにかく私はその時「教会」の衣を脱ぎ捨てて、「神の前に独り立つたる裸体のわれ」になった解放に喜び躍っただけであった。「教会」は無くなつたのであった。

### 二

しかし、このことはただ喜んですむだけのことではなかつた。それは実は恐ろしい経験であった。罪の身が「独り裸体で神の前に立つ」という恐ろ

しき、救いの根拠の動揺という不安、自己同一性（帰属意識）の喪失という寂莫を知ることであった。

私があとにした「教会」は、単に私の若さゆえの潔癖からがまんならないと思えた（私にとって）形骸化した「教会」にすぎなかったが、出てみてわかった教会は、しかし、そんな粗末なものではなかった。私が対峙すべき（理念上の）真の教会は、その堅固な制度をもって「裸体のわれ」を包みこみ、その深遠な秘蹟によって靈魂の救いを保証する、壮大、優美な（カトリック）教会であった。その絶対恩寵主義（尊敬すべき！）のゆえに、「教会の外に救いなし」と主張する、その教会であった。

内村が「無教会」と言ったのは、この教会に対してである。6それは、救いは「人であるキリスト・イエスただおひとり」を仲介者として「神から直接に人に与えられるという信仰（テモテ1・2・4・5）であり、救いの保証は教会制度によらないという主張である。「裸体のわれ」は教会ではなく「主イエス・キリストを身にまとい」（ローマ13・14）、彼の贖いにより「神にかたどって造られた新しい人を身に着けて」（エフェソ4・24）、神の前に立つ。これが無教会の信仰である。

生命（＝信仰）は制度よりも善くある。生命

は規則をもって働かない。生命は必ずしも信仰がある。生命は現れない。生命に不規律なところがある。生命は独り働いて、隊を組んでは働かない。生命は制度のなし得る多くの事をなし得ない。されども生命は生命であって制度以上である。制度は信仰の産である。信仰は主であって制度は従である。信仰は制度によって起こるものではない。神によって起こるものである。制度の用たる、神の起こしたまいし信仰を保存し継続するにすぎない。教会制度はいかに貴く、いかに優勢なりといえども、一人の真信者に遠く及ばないのである。（＝信仰、傍点、武藤）7

ここに表明された信仰は、カトリック教会の秘蹟における「事効」の教義 *Ex opere operato*（「なされたわざから」、 sacrament の効力は執行者や受領者の状態に依存せず、執行される sacrament そのものにあるとする、 sacrament の客観的効力を主張する教義）の徹底的対極に立つもう一つの絶対恩寵主義と言うべきであろう。人の靈魂を救済し得るものは、これら二極の絶対恩寵主義を置いてほかにない、と私は信じている。そのいずれを自らの救いとするかは、私ども自身の選択というより、それこそ「絶対の恩寵」の選びに

よるとしか言いようがない。それゆえに、それはまた恐るべき信仰的決断でもあるのである。「聖職者」から「平信徒」になって、世俗の中で福音を信じて生きる生は、折々に「砂漠に咲く花」を愛でる楽しみは十分にあったにしても、無教会なる約束の地に向かつて、「湧きいでる水」を求めつつ歩む道は（イザヤ35）、まぎれもなく私の「荒野の四〇年」であつた。

### 三

無教会（主義）とは何か。内村は言う。

無教会主義とは、教会は有つてはならぬということでない。有るも可なり無きも可なりということである。<sup>8</sup>  
（洗礼、晩餐の両式は）これにあずかるはよし。あずからざるもよし。要は、十字架につけられし神の子の贖罪を信ずるにあり。その他の事は細事のみ。<sup>9</sup>

「有るも可なり無きも可なり」という言い様は、いかにもあいまいに聞こえる。しかし「有る」と無きは全く反対で、人はその両者を同時に「可」とすることはできない。従つてこの言葉は、あいまい

どころかむしろ人にそのいづれを取るかを迫る厳しい問いである。そして内村自身はその問いに応えて教会や儀式は「無きも可」とし、終生「教会無きキリスト教」<sup>10</sup>に生きたのであつた。

神の生命たるキリスト教が制度でありオルガニゼーション（組織体）であるべきはずがない。生命は時には形態を取つて現れ時には形態なくして生命そのものとして存在する。∴∴信者は神の風に吹かれて霊によりて生まれたる者である。彼が無形たるや言うまでもない。<sup>11</sup>

その論理的帰結にまで徹底されたプロテスタントイイズムは形なき宗教であるに違いない、—純粹に靈的であつて、霊によつてのみ判断される信仰である。<sup>12</sup>

「有るも可なり無きも可なり」は、しかしこれだけに止まらない。確かにそれは極めて明確な立場の表明であるが、それゆえにこそ、決してそれを他に強要することなく、かえつて別の選択に対して「非常の尊敬を表す」<sup>13</sup> 公平で寛容な態度のことなのである。同じ文脈の中に見られる次の内村の言葉がよくそれを示している。

生命は形態を取りて現るるものであるから、神

の霊が時に教会の形態を取りて現るは少しもふしぎでない。われらはかかる形態を貴び、時にそのが身をこれにゆだねるも、決して悪い事でない。しかしながら神と形とが同視せらるる時に弊害は百出する。そして形が神を圧する時に、神は生きんがために形にそむき、これと離れ、これを捨てざるを得ない。無教会主義はかかる場合において起る主義である。貴むべき、なくてはならぬ主義である。14

形式主義が物質主義に陥るように、霊性が非現実性に陥る危険性はあるかもしれないが、その本質においてそれ（霊性）は、あらゆる存在のなかで最も確実なものであり、健全な思考と有効な行為の基礎として十分に頼ることのできるものである。15

このように相対化された無教会主義を内村は「積極的」無教会主義と呼んで、次のように言う。

無教会主義は私の信仰である。私が無教会信者であるは、ある人が○○教会信者であり、またある他の人が○○教会信者であると同じである。これは私の便宜にない、私の性質に合ひ、私の信仰を助くる主義であるからである。私はすべての人が私のごとくに無教会信者であらねばならぬ

と信じない。私の無教会主義が私を救うのであるとは思わない。私は教会問題はキリスト教の根本問題であるとは信じない。私は人に私の無教会信者であることをゆるしてもらいたいように、私は人がその欲する教会に入ることをゆるす。（○○・武藤）

私はここに表れた内村の霊性が17、ヨハネ福音のスピリチュアリズム18に酷似していることに驚く。ヨハネは意識的に「聖餐制定伝承」（マルコ14・22）を外して、そこに洗足の話を入れたのだという（13・1と20）。と言ってヨハネに洗礼、晩餐の暗示がないわけではない（3・5と6、6・32以降）。言い代えれば、ヨハネはサクラメントを全面的に否定しているわけでは決してないが、「命を与えるのは「霊」である。肉は何の役にも立たない」（6・63）と言い切って、「聖晩餐だけでなくサクラメント一般に対する強い関心が、ヨハネには決して見出せないのである。19」内村が次のように言うのも宜なるかな。

余の見たところをもってすれば、ヨハネ伝ほど純心霊的の書は聖書の中にないのである。ヨハネ伝ほどハネ伝に抛りて余は無教会主義を唱うるに難くない。20

ヨハネ福音書四章の有名な「サマリヤの女との対話」の中で、イエスは「礼拝すべき場所」について「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。……今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもつて礼拝しなければならぬ」（21、24）と言われた。これまたヨハネのスピリチュアリズムの著しい一例である。

ここにはヨハネ特有の語呂合わせがあつて、この「でも」も「もつて」も同じ英語の語である。礼拝（神にひれ伏す）の場所（トポス）は見えるかの山、この都ではなくして、「霊と真理」である。神の霊に住んでいただいで生きる（コリント一3・16、17）私どもの生の現実リアリティにおいて、「今」ここで神を礼拝する。別言すれば、「制度」すなわち教会堂や儀式や聖職者や教憲・教規などを一切持たない所で礼拝するのである。このヨハネの礼拝観は、およそ世に言う「宗教」の範疇には入らない、何か全く別な秩序を提示しているのではないか。その意味で、内村がいみじくも言うように、イエスの福音は決して「宗教」ではない。<sup>21</sup>

しかし、問題はそれで終わるわけではない。私ど

もはなおも「霊と真理で」とはどこか、と問わざるを得ない。なぜなら、その場所は決して抽象的、観念的な場所ではなく、具体的、生活的な場所であるに違いないからである。この点で私は、九六年三月の内村記念講演「内村鑑三と第二の宗教改革<sup>22</sup>」における千葉真氏の次の指摘に大いに啓発されるところがあつた。氏は内村の主張から「『純福音』（無教会と言ひ代へても許されるだろう――武藤）の場（トポス）は、『神の国』の場所、つまり、キリストのい給う場所である」とし、さらにその「具体的な場（トポス）」を四つ挙げてゐる。第一の場は信徒の霊性、第二の場は信徒の交わり、エクレシア、第三の場は世界規模のキリストの体としてのエキュメニズム、第四の場は、この世俗世界での人々との関係です。これら四つの場において、『第二の宗教改革』の展開を追求していく必要があります。まことに示唆に富む提案であるし、各「場」について誰もがいろいろと思ひ当たることもあるだろうが、それでも、少し実践的にこれらのトポスで「純福音」に生きたら、いかなる事態をいうのかと考えると、これはなかなかの難問たるを免れないだろう。

この難問は一口に「無教会と文化」の問題と言つてもよいように思う。なぜなら、福音はそれが生きられ、伝播されるとき、何がしかの文化の装いを欠くことはないからである。いま文化を「人間が事柄

に間接に関わる様式の共有<sup>23</sup>」と考えると、本来そのような「様式」を否定しないまでも、それに甚だ無頓着、無関心な教会が文化（とか伝統）を創造できるかという問いである。信仰は一方で文化と対立しながら、他方必ずや文化を生み出さずにはおかない生命であり、力であることも事実だからである。

ここに、恐らく無教会に残された最も困難な課題の一つがあるように思われる。無教会に生きることが決して容易でないことを、無教会人はよくよく認識すべきであろう。

## 五

「テコア聖書集会<sup>24</sup>」は、一九五六年九月二日、故山本泰次郎先生の「キリスト教はどのようにして始まったか」と題する開講講演<sup>25</sup>をもって始まった。会する同志一〇人余。私は初めから決して「独り」ではなかった。

先にも述べたように、私は「無教会に入る」ことなど考えもしなかったが、「主は（私を）救われる人々の仲間に加え」（使徒<sup>2</sup>・<sup>47</sup>）、多くの無教会の友人たちが「一致のしるしとして（私に）右手を差し出し」（ガラテヤ<sup>2</sup>・<sup>9</sup>）てくれて、私はやがて無教会の共同体の中で生きるようになったのである。

る。<sup>26</sup>

しかし、「独り主義」人間の私の心を、自覚的に共同体に向けてくれたのはボンヘッフアーであった。彼は一九四四年のベートゲに宛てた獄中書簡の中でこう言っている。<sup>27</sup>「かつて若きヴィティコーは、『完全なことをなすために』世界の中に進んで行くと言っている。従って問題は、全体的人間（アンスロー・ボス・トレイオス）に関わるものである。――

「あなたがたの天の父が『完全』であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ<sup>5</sup>・<sup>48</sup>）

ヴィティコーは、現実の生活において正しく処することを求め、その場合に経験者の助言に聞くことによって、要するに、自ら『全体の一員』となることによって、『完全をなす』のである。われわれは自分一人で『完全な者』となるのではなくて、ほかの者と一緒になって初めてそうなるのである。」

ここに無教会の人間がよくよく聞くべき「信仰共同体」の論理と倫理の提示があると思う。と言うのは、救いの保証は制度によらないと信じる無教会人は（そのこと自体は全く正しいのだが）、「全体的人間」とは宗教的・道徳的に間然する所のない立派な人間のことでありと考え、得てして徒に自他を審き、道徳主義・律法主義に陥る。また無教会人の中には、第二の宗教改革を目指すとか、教会の革新、

再生を助けるとか（いずれもそれ自体は正しいであろうが）、といった使命感に燃える余り、自分が歴史的教会にいかにも多くを負っているかを忘れ、無教会があたかもそれを超えた存在でもあるかのような錯覚を抱く人もあるようだ。思えば上がりも甚だし

いと云わなければならぬ。イエスの「至上命令」は、私どもが自分一人で「完全な者」になるのではなく、自ら「全体の一員」となることによつて「全体的人間」になることを命じている。なぜなら、全体は「キリストの体」（コリント一12・12以下）であり、その一員は「キリストの体の部分」だからである。この自覚を私は「全体的視点」（マタイ5・45参照）と呼ぶが、パウロの「体」の比喻で言えば、私どもはみな一つの体の部分であるから、「各部分は互いに配慮し合っている」（同12・25）ということである。無教会という「共同体」の中でも、私どもは全体的視点をもつて、と深く互いに配慮し合う部分でありたいと思う。このことはキリスト教界全体についても同じであろう。無教会の理想や志はいかに遠大であつても、無教会人の生きている現実には小さなキリスト教界の中でも、さらに小さな運動体の一つに過ぎない。それは二千年の教会史に接続される可能性があるのか、さへ予測できない。ましてや日本社会に対する影響力といえ、絶無とは言わずともごく小さなもので

あろう。私どもは謙虚でなければならぬ。私どもの分を知つて、キリスト教の各宗派がそれぞれの特長をもつてキリスト教界全体に貢献してきたように、無教会もまた私どもが涵養してきた靈性とエートスとをもつて全体に仕えるものでありたいと思う。その時私どもは、無教会の独立と自由のゆえに、神が愛しておられるこの「世」（ヨハネ3・16）、イエスがその為祈られた「すべての人」（同17・21）を包含する「全体」の一員となつて、「完全をなす」ことができるであらう。

## 六

内村逝いて七〇年、無教会の多様化が言われて久しい。当然と言うべきか、無教会のアイデンティティが問われ、無教会の自己批判、さらにはその危機がうんぬんされる。私個人は、神の民としての無教会にはもちろん深い関心を抱いているが、「無教会」という集団の行方にあまりこだわらたくない。工夫し努力してその保持と進展に成果をあげ得たとしても、それは恐らく「セクトからデノミネーション」という教会史の通則のうち一つの例となるにすぎないだろう。現に「無教会」の中にその徴候が現れ始めているようにも見えるが、仮にそうだとにしても、そのこと自体



は、内村の言うように、「われらはかかる形態（教会）を貴び、時におのが身をこれにゆだねるも、決して悪い事でない<sup>14</sup>」のである。

この「無教会」の現況を考えるとき、私はそれとヨハネ共同体（ヨハネの手紙も含めて）の命運との間に、ある暗合を看取して肅然とせざるを得ない。ヨハネ共同体では前述のスピリチュアリズムが高揚したのち、「実にひどい話だ。だが、こんな話を聞いていられようか」（6・60）とする反動が起り、福音書に第三版の改訂が加えられたものと思われる（6・51〜58、5・27以下、21章など<sup>28</sup>）。そこに反映される共同体は、「精神的なものと対立する物質的なもの（儀式）への関心が新たな形で高まり<sup>29</sup>」、「やがて起こり来る初期カトリックの大教会<sup>30</sup>」へと向かい始め、遂には自分たちの共同体に「教会（エクレシア）」（手紙三6、9、10。ヨハネ文書にこの三か所のみ）という新しい呼び名を付けるに至ったのである。

「神の霊が時に教会の形態を取りて現るるは少しもふしぎでない。<sup>14</sup>」しかし形態は必ず滅するものである。現在私どもはどこにも「ヨハネ教会」の痕跡を見ることはできないが、彼らの信仰的・思想的苦闘とその勝利の記録は厳然として私どもの目の前にある。私どもはこの厳粛な事実を忘れてはならない。

確かに「生命は制度のなし得る多くの事をなし得ない。7」ばかりでなく「霊性が非現実に陥る危険性は（大いに）ある。15」無教会に様々の不都合欠陥、誤謬、危険があることは事実だ。しかし私は内村の「霊性への絶大な信頼<sup>15</sup>」に励まされて「無きも可」の道を取り、むしろ内村のひそみに<sup>31</sup>ならい、て補完するより、むしろ内村のひそみに<sup>31</sup>ならい、<sup>not Mukyokai enough</sup>（無教会に徹底せざる）がゆえと心得て、教会なしで生きていきたいと思う。

無教会は「無境界主義」であるとも言おう。32 そうであれば、無教会に生きるとき、人は「教会」とか「宗教」とかいう陝隘な世界を出て、世俗というもつと広大な地平で、あるいは人それぞれの「辺境<sup>33</sup>」において、独り立つゆえに、より多くの異なる他者と共に、より自由に、より闊達に福音の為に働くことが出来るのではなからうか。

国旗・国歌が法制化されて国家権力の増大が懸念されるこの時代に、私どもは改めて信教の自由の問題を自覚させられている（これはついこの間の私どもの先輩達の苦闘であった）。国家権力（その体制と法）にどう対峙するか。教会制度と教会法をもつてするのか、それともただ信仰（神の支配への信頼と主イエス・キリストへの忠誠）のみによって立つのか。私は後者の方がより賢く、より堅実だと考えるが、いずれにしてもこれまた実に深刻な決断である。



ると言わなければならぬ。34

七

最後にもう一度内村に戻る。今更言うまでもなく「無教会（主義）」は内村の造語である。当然のことながら、彼はこの語を用いて自分のキリスト教を説明しようとしたが、その使用頻度は人が思う程多くはない。35

こんにち「無教会」の中にも、この語が消極的に過ぎ無用の誤解を与えるとして、その使用に疑義を呈する人たちがあつた。「全国集会」に於いても、その「無教会キリスト教」という名称が問題とされてきたし、各個集会ではすでに多様な名称が用いられている。私自身も自分たちの集まりを殊更に「無教会」と呼ぶなど考えたこともなく、発足当初から「テコア聖書集会」と称している。

しかし自己確認の問題として、私どもの信仰共同体全体をどう呼ぶかとなると、果たして「無教会」以上に適当な呼称があるだろうか。残念ながら無いのではない。

内村はその晩年（一九二七年）、英文雑誌『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』の、先程から引用している「霊と形」と題する一文の中で、こう言っている。

よりよい名称がないので（傍点、武藤）、私はこの形なきキリスト教の形を「無教会主義のキリスト教（Christianity of no-church principle）」と呼ぶ。しかし実質には名称以上のものがある。それは否定的な信仰ではない。積極的な信仰である。

内村はここで、日本という異教国にあつて、四〇年間独力で宣べ伝えてきた自分のキリスト教について、その名称について語つたのである。この短い文章にこめられた内村の謙虚と、彼の自負と、そして彼のユーモア（余裕―内村の訳語）に私は感動する。内村に師事して、私もまた無教会を「恥とせず」（ローマ1・16）、キリストの福音に生きていきたいと願う。

注

本稿はもと『テコア聖書集会四十周年記念文集』97・6刊への寄稿文「無教会と私」に加筆し、若干の注を付したものである。内村鑑三の引用はすべて教文館版の全集による。「信」「注」はそれぞれ「信仰著作全集」「聖書注解全集」を、181204は18巻204頁を示す。

1 一九四三年一二月、四五年八月、海軍志願兵と



具体的には一九七一年から「キリスト教夜間講座」に参加。事務局の石倉啓一、伊藤進、オカノ・ユキオ、田村光三諸氏の格別の厚情に与かった。

『抵抗と信従』（ボンヘッフアー選集5、倉松功・森平太訳、新教出版社、64・2刊）148頁。

U・C・フォン・ヴァールド「葛藤の信仰共同体―ヨハネ共同体の歴史と社会的背景」『インタープリテーション』第37号（96・5刊）所収参照。

同右。  
19に同じ。

“because they are not Protestant enough.” 「カトリックに成らず」6に同じ。

政池仁「無教会主義とは教会と教会との間の境界をなくする無境界主義であります。」『聖書の日本』第156号（49・6）。

新井明「辺境のめぐみ」『第10回無教会キリスト教全国集会記録』（97・5刊）所収、参照。

一九七五年二月、「キリスト教夜間講座」のシンポジウム「無教会における共同体の形成について」において、この問題について東京告白教会牧師渡辺信夫氏と『十字架の言』主筆高橋三郎氏との間に激論が交わされた。これは、私が

無教会の問題を公のこととして考えるようになる一つの契機となった。高橋三郎「無教会における共同体の問題」『十字架の言』第123号

（75・3）参照。  
信25―436（438）、参照。  
12に同じ。

（所載）「無教会」第3号 二〇〇〇年二月  
無教会研究所